

ミャンマーのナッ信仰とナッカドー  
—タウンビョンとヤタナグの祭りを通して—

Nat-belief and *Natkadaw* of Myanmar  
—Case of *Nat Pwe* (festival) of Taunbyon & Yatanagu—

中村 羊一郎  
Yoichiro NAKAMURA

(平成26年10月2日受理)

ミャンマー人には敬虔な仏教徒が多い。その内容は、祖先祭祀が中心になってしまった日本人とは異なり、あくまでも個人の解脱を求める上座部仏教であるが、じつはナッ (NAT) という精霊に対する信仰も盛んであり、個性をもった多くのナッが存在し、人々のさまざまな現世的な要望に対応している。なかで、マンダレー郊外のタウンビョンという町の神殿を舞台に行われる祭りはミャンマー最大のナッポエ (精霊祭り) であり、国内から数多くの信仰者が集まり、かつてのビルマ王朝の祭祀を思わせる多彩な内容の祭りが展開される。またそれに引き続き、マンダレーの南に位置する古都、アマラプラ郊外のヤタナグでも関連する大規模な祭りが行われる。本稿では、この二つの祭礼についての現地調査の内容を報告するとともに、これらの祭礼に重要な役割を果たしているナッカドー (ナッと人間との媒介者でもある民間宗教者) たちからの聞き書きを合わせて報告し、若干の考察を加える。

## 1 祭りの背景

### ビルマ略史

ビルマ (ミャンマー) の歴史は多様な民族の興亡史でもある。現在の国境線でいえば東はタイ、中国と接し、西はインドとバングラデシュに接しているが、国境線は近代になってひかれたものであり、当然ながら諸民族の境界は常に変遷を繰り返していた。現在の国土の中央にはエーヤワディー (イラワジ) 河が流れているが、この河こそビルマ全域にわたって人や物を運ぶ運搬路であり、また流域に多くの都市を繁栄させた、いわば母なる河といってよい。エーヤワディー河は下流域に広大なデルタを形成し、王朝の経済力の源泉となり、さらに豊かな国土は豊富な木材資源や宝石類にも恵まれている。一般に国土北半分を上ビルマ、南半分を下ビルマといい、北部の中心都市はマンダレー、南部はバゴー、ラングーン (ヤンゴン) であった。ビルマの中央部を最初に支配したのは謎の民族ともいわれるピュー族であったが、南部にはモン族、西部にはラカイン (アラカン) 民族がおり、中国に近いあたりにはシャン族も力をもっていた。そうした中で、チベット方面から南下してきたビルマ族は8世紀頃にはビルマ中部に進出し、カヤインと呼ぶ小国家群を形成し、やがて11世紀なかごろにアノーラーター王のもとで全国統一王朝を成立させた。本拠となったバガンの地名にちなむバガン王朝である。アノーラーター王は、南部のタトンを征服し

た際、スリランカ系の上座部仏教の高僧、シン・アラハン（モン族）ら多くの僧侶をバガンに移し、バガンがビルマ仏教の中心地として大いに栄えることになった。

このバガンの王のタトン遠征は、王朝の由来や成立とも深く関わっているだけでなく、民間信仰の中心であるナッ信仰に大きな影響を与えることになった。たとえば、本紀要第14号（2012年）で報告したシャン州インレ湖のパンドーウーパゴダにおける壮大な祭りを支えるインター族は、このとき内陸部に連れてこられた海の民の末裔ともいわれ、また湖周辺の山岳地帯に居住するパオ族もまたマレー半島の付け根あたりからビルマ中部に移されたと伝承している。そして、本稿の主題であるタウンビョン及びヤタナグの祭りの主人公たちの物語も、このアノーラター王の遠征が、そもそもの発端となっているのである。

バガン朝は平原地帯に残る数千基のパゴダ群を建造したことで世界的に知られているが、この王朝はモンゴル軍の侵攻によって1287年に滅亡した。その後ビルマ国内は南方のモン族、東方のシャン族などが入り乱れての混乱が続くが、1752年にコンバウン朝がシュエボーに興り、1754年にアラウンパヤー王がインワをモン族から奪還し王都をインワに置いた。しかし1783年、ボドーパヤ（Bodawpaya）王はインワの北11kmほどに位置するアマラプラ（Amarapura）に遷都した。アマラプラとは不滅、不死という意味である。ボードパヤー王はマンダレーから11kmほど川をさかのぼったミンゲンに奴隷や囚人を動員して巨大な寺を造営し始めたが、1819年の王の死後、工事は中止され煉瓦造りの大基壇がそのまま残されている。1823年にバジドー（Bagyidaw）王によって都は再びインワに遷され、さらに1841年に再度アマラプラが都とされた。ところが1857年にミンドン（Mindon）王がマンダレーを首都にすることに決め、1860年にマンダレー遷都となった。なお19世紀はヨーロッパの勢力によるアジア植民地化の動きが激化した時期であり、アマラプラには1795年に最初のイギリス大使館が置かれ、その後イギリスのビルマ侵略は1824年の第一次英緬戦争を契機にいっそう進み第三次英緬戦争を経てビルマの王政は崩壊してイギリスの支配下にはいった。アマラプラはわずかな期間だけの首都であったこともあり、城壁の一部しか現存していない。ヤタナグはこの旧都アマラプラに属し市街地の南部に位置する。

いっぽうタウンビョンはマンダレーの北約15kmにあり、とくにナッ信仰以外には王権との関係についての伝承はない。しかし、タウンビョンにおける祭りの始まりが、バガンの王の中国遠征に関わるものであり、バガンからはエーヤーワーディー河を遡行し、陸路中国に向かう道筋に当たっている。本稿で取り上げる二つの祭りには、このエーヤーワーディー河の存在が大きく関わっているといっていよい。

### ミャンマーのナッ信仰

国民の多数を占めるビルマ族は、ビルマ・チベット語族に属し、熱心な上座部仏教の信者であり、国内いたるところに信仰の証としてのパゴダを建立し、隣接するパヤー（いわゆる寺院）における僧侶の暮らしを国全体で支えている。ミャンマーが仏教国といわれる所以であるが、同時に伝統的な精霊信仰から発した神々とも共存している。この神はビルマ語でNAT（発音としてはナッ）といい、人々はちょうど日本の民間信仰における神々と同じような感覚で接している。というよりも、普遍的な思想としての仏教は個人個人の生き方、思考法に連なるものであるのに対し、ナッはきわめて現世利益的な神々である。たとえば、自動車を購入すれば交通安全のナッに祈願をかけ、運転席には仏像や信仰する

僧侶の写真とともにナッに捧げる花を吊るす。病氣平癒や商売上のアドバイスを受けることも多い。こうしたナッと人間とを媒介するのがナッカドーといわれる宗教者であり、市井の自宅を祈願所とし、信頼を寄せる信者に対して適切な助言を与え、祈祷を行う。ナッは本来不可視の存在であるが、基本的にはビルマ王朝内の貴人の衣装をまとった形で造形され、ときに権能を示す道具類を持つ。たとえば、海上安全のナッであるウッシンジーは、豎琴を抱えるなどである。また、後述するような王統に連なるナッのなかで特に霊力が強いとされるマハギリは、各家庭の神棚に祀られて青いココナツを供えられ、夜間は赤い布をその前に垂らされる。ナッは、このように家や個人の守護神であるが、同時に仏教を守護する存在でもあり、パゴダの周囲にはナッの像が数多く配置されている例も少なくない。また、パゴダあるいは都市建設地の地霊と思われるボーボーギーと呼ばれるナッがあり、該当する建物を守るような形で安置されている。

つまり、ビルマ族の宗教観念を理解するためには、上座部仏教とともに、このナッに対する信仰を理解することが不可欠である。なお、同じく上座部仏教を深く信仰しているシャン族及びその系統に連なる諸民族の間にも独自のナッ信仰は存在するが、本稿で述べるほどの強烈な信仰を見せることはない。

そもそもナッはいわゆるアニミズムに連なる自然神であった。加えて、もとは人間であったが、特別な能力を有したり、不幸な人間関係の結果、非業の死を遂げた者がナッとして多くの信仰を集めることがある。これは日本における御霊信仰ときわめてよく似ている。これらのナッの中でとくに王権と深く関わるナッを集め、37ナッという形で集成したのはバガン朝であった。37という数字は、ヒンドゥー仏教の世界観で重要な4の数字の倍数である36に、仏教の守護神であるダジャーミン（帝釈天）を頂点においたもので、時代や人によって異同がある<sup>(1)</sup>。37ナッのなかで特に神威が強く、いわゆる人気が高いナッが都鄙を問わず多くの人々の信仰を集めており、その代表ともいうべきものが、本稿の主題でもあるタウンビョンの兄弟ナッなのである。

このように概観すると、ビルマ族の信仰形態は、仏教を基盤にしながらも、民間の諸神に寄せる現世利益的な信仰、そして霊威の強い神々の成立契機など、仏教そのものの性格の違いこそあれ、日本人の信仰と共通する点が多い。本稿では、ビルマ族の信仰の概要をこのように理解したうえで、もっとも霊力が強く、かつ民族内で普遍的な信仰を寄せられている兄弟ナッ及びその母に対する信仰の実態を、多くの信者を集めて催される祭礼の実際をもとに描いていくことにする。

なお、この祭りは観光面からは比較的知られてはいるが、学術的な報告と分析はごく少なく、断片的な情報や観光情報がほとんどである<sup>(2)</sup>。また近年まで外国人の国内旅行が制限されていたため、いわゆる人類学的な研究蓄積も少ない。しかし、民主化の進展によって都市部のみでなく周辺農村への調査も可能になってきたため、これからは外国人による数多くの参与観察報告や分析が行われることになるだろう。

本稿は、タウンビョンに関しては、2003年8月、ヤタナグについては2012年9月における現地調査をもとにし、これ以外にもミャンマー各地で随時聞き取りなどを行ってきた各地の事例とともにまとめることとする。

### タウンビョンの兄弟神と祭り

バガン朝の創始者、アノーラター王（在位1044—77）は1057年にタトンに遠征した。タトンは難攻不落の都市であった。それにはこんな伝説がある。タトンに住む僧が海岸に流れ着いた二人のインド系の赤ん坊を発見したので、それぞれビャウイ、ビャッタと名付けて育てていたが、この僧があるとき錬金術師の遺体を見つけて僧院に運び込み兄弟に遺骸を炙るよう指示した。それを食べると屈強な男になることができるとされるので、僧は「王に知らせに行ってくるから留守をしているように」と命じた。しかし遺体から立ち上るよい香りに耐え切れず、兄弟は遺体を食べつくしてしまい、その結果身体に強大な力が備わったので、その力を発揮して国内を逃げ回った。その後、兄のビャウイは貴人の娘と恋仲になり、その父親の策略により捕らえられた。ビャウイは死の間際、自分の体を刻み内臓とともに王宮に埋め、血を城壁に撒けば難攻不落になると教えた。やがてアノーラター王が城を攻めたがこの霊力のためにどうしても落とすことができない。隠れていた弟のビャッタは司令官に見つかって家来となり、城に忍び込んで兄の亡霊に会った。そして兄から城壁中の一か所だけ、血を撒いてなかった場所を教えられたので攻略に成功し、アノーラター王は勝利を収める

ことができた。ビャッタはアノーラター王の家臣となって王都バガンに行き、毎朝聖山であるポッパ山に行って花を集めて王に捧げる役についた。ところが山に住んで花を食べている鬼女と恋仲となり、二人の子を儲けたがそれが原因で毎日の仕事を怠った。怒った王はビャッタを処刑し遺児たちは引き取って育てた。これが、のちのタウンビョンの兄弟であり二人はよく王に仕えた<sup>(3)</sup>。



図1 タウンビョンの兄弟 (Temple “Thirty seven Nats” より)

あるとき王は釈迦の歯（聖歯）を手に入れるために中国に遠征し、兄弟に王宮に潜入して聖歯を持ち帰るように命じた。兄弟は聖歯を保管してある場所に行って存在を確認し、持ち主である中国王の寝所に行って、キンマに使う石灰の粉を王の腹のうえにパラパラと落として王の刀を持って来るにとどめた（一説では王の腹に3本の筋を描いてきたとも）。兄弟の目的が、王を殺すためではなく、聖歯が欲しいだけだということ表示であった。目覚めた王は大いに驚きアノーラター王に対して、聖歯を見せてよいが、持ち帰ることは認めないといったので、アノーラター王は聖歯をあきらめて国に帰ることにした。帰途、タウンビョンまで来たとき乗っていた象が歩みを止めてしまった。そこ



写真1 刀を手にしたタウンビョン兄弟の像 (ヤタナグ)



でこの地に釈迦の聖齒の記憶を留めるために寺を建立することにした。そして家来たちに一人につき一個の煉瓦と手一杯の砂を持ってくるよう命令した。ところが兄弟は木の下で遊んでいて煉瓦を持ってこなかった。捕らえられた兄弟は王が竹林から持ってこさせた竹でもって死ぬまで打たれた（この結果、兄弟を縛るのに使った縄を提供した村と筈になった竹を提供した村は、このタウンビョンのお祭りの日には来ることができない、という伝説が生まれた）。なお兄弟に仕えていたマングレー・ボードーは兄弟を逃がそうとして失敗して殺され、ナッになった。その後、王がエヤーワーディー河を下ってバガンに帰ろうとしたが乗った船が動かない。王は兄弟の祟りと考え、二人をナッに祀ったところ船が動いた。兄弟ナッにはタウンビョンを中心にした広い土地が与えられた。



以後、この兄弟を祭る神殿は、兄弟が遠征に出発した日、同じく戻った日、鎮魂のための日とされる年3回の祭日に多くの人が訪れるようになった。ちなみに現在の神殿内部には、兄弟が運ぶはずだった煉瓦2個分の欠けた場所が設けてあり、また兄弟がその下で遊んだといわれる木もある。写真2 レンガ2個が欠けている神殿

アノーラター王に殺されてタウンビョンに祀られることになった兄弟は、シュエピンジー (Shwebyingyi) とシュエピーゲー (shwebyinge) といったが、ナッになってからは、コードジー (ko Daw Gyi) とコードーレイ (Ko Daw Lay) と呼ばれ、剣を持ち虎を従えた姿で描かれる。強力な霊力をもっているとされ、商売繁盛や健康を祈る庶民から熱烈な信仰を受けている。祭日には、ナッカドーたちがこの兄弟の前で踊りを奉納するためにやって来るのである。

タウンビョンの祭りは年に3回ある。満月を中心に組み立てられたビルマ暦をもとに行われるので太陽暦の区分とはかなりずれるが、おおよそ12月のナドー月 (NA DAW)、3月頃のタバウン月 (TA BAUNG)、8月ころのワカウン月 (WA KHAUNG) である。このうち、ナドー月は兄弟の遠征出発、タバウン月は帰国した時とされる。最も盛大な祭りはワカウン月の満月を最終日とする祭りであって、そのハイライトが、兄弟像の水浴と最終日の伐木の儀礼である。後述するように、村内に無数に設けられるナッカドーのための「栈敷」の使用料はこのワカウン月に徴収され、他の時には無料で同じ所を使えるという。もう一点、数あるナッの中で人気のあるウーミンチョー (別名コジジョ) がこの時にやって来るとされている。コジジョは闘鶏に狂い、いつも酒をくらって酔っぱらっているという剽軽な神様であるが、もともと兄弟の伝説には関係のないナッである。コジジョの本拠つまり神殿はエヤーワーデー河を船で二日ほどさかのぼったパカンという町にあり、ここの祭りに際しては実際に闘鶏が行われるという。

### ヤタナグの祭りの由来

いっぽう、このタウンビョンからマングレーを挟んで南に位置するヤタナグにおいては、タウンビョンの祭りがワカウン月の満月に終了したのち、その月が完全に欠けてしまう新月を最終日として、兄弟の母であるポッパメイドーの祭りが5日間ほどにわたって行

われる。この祭りに参加するため、ナッカドーのかかりの人々がタウンビョンの祭りが終わり次第ヤタナグに移り、主要なパゴダの境内に栈敷を構えて自らの信奉者を迎える。そのためヤタナグのパゴダ前は、タウンビョンと同じような雰囲気となる。兄弟の母であるポッパメイドーの像本体は美女であるが、頭上に緑色の恐ろしい鬼の顔を頂く姿に造形されており、花を食べる鬼女とされているため、神前には真っ赤なバラの花が供えられる。伝承では母親は兄弟の父親が殺された時に嘆きのあまり死んだとされている。しかし当地ではタウンビョンにいた二人の息子に会いに行き、ポッパ山に帰る途中、この地で兄弟が殺されたことを知って亡くなったので、村の人は遺骸を火葬に付してパゴダを建立した。現在、煉瓦作りの壊れかかったパゴダがヤタナグパゴダの境内にあり、それがポッパメイドーを祀る古いパゴダだとされる。このパゴダは水辺と向かい合っており、岸からパゴダに通じる短い参道の入り口には巨大な菩提樹が立っている。祭りの最期に、ナッカドー達が捧げ物を持ってここから小舟に乗り、ポッパメイドーを送り返す儀礼を行なう。

## 二つの祭りの日程

日程の上でも催される場も相互に若干離れてはいるが、月齢をもとにすると、兄弟の祭りは満月、母の祭りは新月ということで、年に12ある朔望サイクルのひとつが、そのまま祭りの起承転結と重なっていることが注目される。つまり二つは密接に関連しているので、全体の流れを最初に確認しておきたい。この二つの祭りの日程は下記のとおりであるが、右に示したのは筆者の調査時におけるミャンマー暦に対応させた太陽暦の月日である。

ワカウン月	内 容	調査時における太陽暦
6 日	ナッカドー達が栈敷を設定	2003年 8 月 3 日
この間、参詣者に対してナッカドーたちが小屋や神殿で踊る。		
8 日	神殿で奉納の踊り	8 月 5 日
11日	水浴の儀式	8 月 8 日
12日	(とくにナシ)	8 月 9 日
13日	(とくにナシ)	8 月10日
14日	ウサギ肉を献上 木を伐る(予行演習的)	8 月11日
満月	正式に木を伐る→祭り終了	8 月12日
1 日	ナッカドウ達の一部がヤタナグに移動	8 月13日
(省略)		
9 日	アポナンナンでポッパメイドーの水浴	2012年 9 月 9 日
10日	コーミョーシンの水浴	9 月10日
11日	ポッパメイドーの水浴	9 月11日
12日	エイドゥインオンボーボーのマハグリの水浴	9 月12日
13日	(とくにナシ)	9 月13日
14日	エイドゥインオンボーボーでの伐木	9 月14日
新月	木を伐り、菩提樹の脇から船で送り出す	9 月15日

筆者がタウンビョンで調査を行った2003年の場合、ワカウン月 6 日は太陽暦の 8 月 3 日に相当、またヤタナグの2012年の祭りの満月 9 日は 9 月 9 日に相当していた。なお上記の12日(マハグリの水浴)と14日の伐木は、当該集落独自の祭りであって、ヤタナグの祭り

とは直接関係ない。

## 2 タウンビョンの祭り

### 祭りの場

タウンビョンはミャンマー第2の大都市、マンダレーの北にあり、ワカウン月の祭りは月の満ち始め第6日ごろから始まる。2003年の場合は、太陽暦で8月3日に相当したが、筆者は8月6日にマンダレーに到着、午後に車で45分ほどの位置にあるタウンビョンに向かった。国中に知られた有名な祭りであり、マンダレー市場の一角に自動車の溜まりがあって、乗合客を呼び込もうと、「タウンビョン、タウンビョン」という声がスピーカーから流れている。バスなら1時間たらずの行程で料金は300Ks（チャット、ミャンマーの貨幣単位で日本の1円がおおよそ10ks）。近くでは氷を溶かしながら一杯10Ksで売っている女の子がいた。タウンビョンは大変な人出で、有料駐車場もあちこちにある。兄弟を祀る神殿に通じる道の両側には市場のような仮小屋があり、各地からやってきたナッカドーが、自ら持ち込んだたくさんの神像を安置した前で昼寝をしたり、所在なげに座ったりしている。この場所は村から有料で借りるそうで柱一間（1コマ）が期間中で1万Ks。年に3回祭りがあり同じところで店開きをするが支払いをするのはこのときだけだという。寝泊まりもここですることになるので、警察に届け出て許可証が見えるところに貼ってある。

村に入る前のナッシン（小祠）の脇にいたナッカドーの一人、テ・ダ・ティンという女性（35歳）は、16歳の時からナッカドーになった。その契機は自分の夢や何となく座っている時に自然と言葉が出てきたが、それが他人に対する予言であった。当初ははっきりしなかったが、初めて当たったのは「あなたは人にお金は貸さないほうがよい、貸せば返ってこない」と予言したことだったという。あるいは家を建てる大工に、このへんで誰々に寄付すればもっと仕事がもらえるとあって、当たったことがある。プーミングとタイナインシン、それにタウンビョンの兄弟神を自分の守り神と考えている。ナッカドーになった16歳の時、どのナッカからナッカドーになれと言われたのか、その時ははっきりしなかったが、ナグタイから生まれたのが自分であると分かり、お祈りしたところプーミングから、こういう仕事をしなさいと夢や心の中で言われた。その頃から夢にタウンビョン兄弟も出てくるようになった。以前はメッティラにいる先生（師匠）とここに来ていた。このナッシンは先生のものだが、まわりの土地は近所の人のものである。4年前に、先生からこの場所で続けてやりなさといわれたので、以後は自分だけ毎年来ている。自分の親がラシオの政府で働いている関係でラシオに住んでいた。しかし、おばあさんがメティラにいたのでよく行くことがあり、その時におばあさんを通じて先生と知り合った。ナッカドーは神と結婚する儀礼があるが、まだ独身であり神様とも結婚していない。この栈敷にいと、全く知らない人が寄ったり、知り合いから紹介を受けた人も来る。ナッカドーへの謝礼金は志次第だが、タウンビョン兄弟にお参りに行く人に対しての準備もここでやってやる。たとえば、供え物などの費用が5000Ksかった場合、1万Ksくれる人もあれば5000Ksだけの人もいる。あるいは予言が当たった人が翌年やって来てお礼をいい、その人から輪が広がることもある。

村の中は大変な雑踏で、ヤンゴンでのジョークに、タウンビョンにはスリが多く、女性

がブラジャーをすられたそうだという話まであるほどである。警察も厳しく取締りをしており、護送車の金網の中に大勢の男たちが載せられていく光景も見られた。祭りの期間中は収監されているという。ナッカドーがそれぞれ設けている小屋には信者が詰めている。信奉者が来ると、ナッカドーは、楽団の演奏をバックに汗みどろで踊る。それに合わせて信者は少額紙幣をあたりにまき散らし皆が争って拾うという場面もあれば、カセットの音楽に合わせて一人路上で踊っているナッカドーもいる。金持ちの信者は、お目当てのナッカドーが踊っている最中に、高額紙幣を衣装にピンで縫い付けてやる。

人通りの激しい一画に、筆者がかつてヤンゴンの自宅を訪問したことのあるナッカドー、ヤンゴン・ウイ・ライン氏が本拠を構えていた。彼はヤンゴン市内でたいへん人気があって、村の中に一軒家を買って取り、汽車で神像なども一緒に運んできている。そこに多くの信者がやってくるので昼食などを提供し、夜は泊まらせる。ヤンゴンからはるばるバスでやってくる人も多い。この日は白いシャツ姿で顔に薄化粧をしており、訪れた人の話を聞きながらアドバイスをしていた。彼によると、多いときにはヤンゴンから全部で40人もの信者がここに来るといふ。水曜日は王様がナッに見る日であるから、その日は一般人にはナッは答えてくれない。ヤンゴンからの汽車は一日に5本。マンダレー・タウンビョンの汽車賃は100Ksである。彼は10日ほど前に一両60人乗りの車両2台半の人と一緒に来た。今日はヤンゴンから3台分の人がある。お金のある人はマンダレーに泊まる。8月10日には自分が踊るのでそれを見に来る人のためにさらに車両3台分予約してあるという。

ナッの信仰と仏教とは矛盾しない。ナッは仏教やパゴダの守護神でもある。たまたまここに同席していた35歳の僧侶は、メティラの南にあるヤメティーンに生まれ、11歳で僧になり寺の学校で勉強していた。先生のお坊さんが身体が弱く、その世話をずっとしてきたが、社会に戻るか、僧になるかで迷ったとき、先生から、お坊さんの勉強をしなさいと言われ、今は坊さんを教える先生になるための試験を受けている。坊さんの大学はヤンゴンとマンダレーにある。会話の中に、仏教を守る神は「涼しい」が、ここのナッは「熱い」という微妙な表現がでてきた。ビルマ人の価値観には「熱い／冷たい」という二元的な表現があり<sup>(4)</sup>、この僧侶の基準によれば同じナッの中にも、仏教にとって善いナッと悪いナッがあることになる。タウンビョンのようなナッは当然ながら仏教の範疇に入らない悪いナッということになる。

パゴダ脇の広場は、伝説の兄弟が遊んだといわれている場所、大きな木（ドー）のある所なので「ドーの場所」と呼ばれている。その近くで木の実を使った占いをやっていた。3mほど離れた所にその木の実を3個おき、反対側から指ではじき飛ばした実が回転しながら3個ともに当たれば幸運であるというもので、子供が巧みに木の実を転がしてお金を貰っていた。神殿の近くには祭りに際して重要な役を世襲的にやってきた人々が期間中のみ滞在する長屋があって、それぞれ捧持する道具を祭壇に飾り、家族そろって待機している。ここでの聞き取りの内容は後述する。



写真3 兄弟が遊んだという木の下（タウンビョン）



## 祭りの特徴

2003年のワカウン月の祭りは太陽暦8月12日の満月に最終日を迎えるという日程で執行された。筆者が今回直接見ることはできたのは、8月7日から最終日の同12日までの諸行事である。その中でも8月8日には兄弟の像を水浴させる儀式、11日には兎肉を献上し、木を伐る儀式があり、12日に再度木を伐る正式の儀礼をもって終了するまでを見ることができた。

この重要な三つの儀礼のうち、木を伐ることと神像に水浴させることは、後述するヤタナグの祭りにおいても中心的な神事となっている。木を伐るとは、境内の地面にちょうどクリスマスツリーのような感じでテインビン（Htein Bin、ピンは木の意味）の枝を立て、その周囲を回った後で剣をもって切り倒すのである。その理由は、この木のナッが水牛となって現れアノーラター王を殺したとされ、その復讐として兄弟が領域内にあるすべてのテインビンを伐り倒したことに因むといわれる。

また水浴そのものは信仰上珍しいことではなく、たとえばミャンマーの旧正月（太陽暦ではほぼ4月中旬）の水かけ祭りでは、パゴダに安置してある仏像を外に持ちだして信仰者が白檀を溶かした香り高い水をかけることが広く行われている。当地の水浴は、現在は神殿前に設けた特別な建物内で行われるが、以前は近くの川に浮かべた船上で行われていた。しかし水が汚れてきたことなどの事情で、現在のような形になったとされる。

また、タウンビョンでのみ行われる兎肉の献上については、兄弟がかつての王都アマラプラを通ったとき土地の人がウサギを食べさせてくれたという故事によるもので、以後、この祭りにはその時に肉を差し上げた人の子孫がウサギを奉納する。これは儀式の最後に千切りにして野菜と和え、行列に奉仕した人達（アナーダム）全員に少しずつ配分される。

## ワカウン月第8日の祭り

第8日（2003年8月7日）の午後、タウンビョンの神殿内で最初の大きな儀式があった。神殿の奥にはタウンビョン兄弟をはじめとする多くのナッの神像が並べられ、その前で楽団が奏する賑やかな音楽と専属歌手による歌が流れた。そして手に手にダビエ（日本のサカキに相当する常緑樹で、あらゆる神事に使われる）の枝を持ったナッカドー達が室内を廻り始める。

その中心になるのは、大臣と王妃たちである。宮廷に仕える大臣の服装の男性8人（赤帽と緑帽各4人）はボンソ

ン（Bong Soung）と呼ばれる。ボン

は帽子、ソンはかぶるの意味で、い

ずれも男性ナッカ

ドーが扮する。大

臣の役として緑色

の帽子をかぶる役

のソーモエナイン

さんは（61歳）は、



写真4 ボンソン（大臣）



写真5 トーソン（王妃）

先生からナッへの供物のやり方や踊りも教えてもらい、帽子を譲られてから11年になるという。帽子は王に仕える大臣を表しており、緑色は王の相談役で、赤い帽子は祈りや王の家族のことなどに関する話し相手で、赤い帽子の方が位が高いとされる。ボンソンは昔は赤・緑各2名の4人であり、別に補欠の人がいたが、今はそれぞれ4人の計8人となった。王妃4人は女性ナッカドーが扮し、トーンソシミパヤ（Thou Soung Mi Payar）ともいう。ミパヤというのは王妃の意味。頭の上に座布団のような台を載せ、この四隅にはランなどの生花がさしてある。金色と銀色の2種類があり、銀色は北、金色は南を表し一番偉い王妃は北の人だという。トーンソンのトーは羊という意味で、四隅の突起は羊の角を表すとされる。伝承では、兄弟二人は羊をたくさんもっていて妻も多かった。そこでそれぞれの妻に羊を何百頭ずつ割り当てた。本来は金と銀が各4人で計8人だったが、銀の2人と金1人が亡くなって、現在参加者は4人になってしまった。

まず、ダビエの枝を両手で捧げ持って仏様に祈る。歌の調子はスペインのカンテフラメンコにも似た若干声をふるわせるような発声である。そして、すべてのナッ（111柱）を呼び寄せ、コジジョも特別に呼び寄せた。タウンビョンの兄弟二人に対して祈るときは、ダビエは手に持たず、手の動きだけで呼ぶ。ついで、妃2人が刀を抜いて踊る。刀の上にバナナの房をひっかけるようにして載せる。コジジョの踊りでは、手には金箔を貼った鳥の模型とお碗を持つ。鳥はコジジョが大好きな闘鶏を表しお碗は酒を示す。踊りのあとコジジョが観客の中に入っていくと皆が碗にお金を入れる。踊りが終わると碗の中のお金を祭壇に供えるのを契機に札をばらまく人がいてお札が舞う。金持ちが1000チャット札をナッカドーに渡すとナッカドーはそれを自分の頬に押し当て汗をつけて持主に返す。周辺ではスプレーで香水を振りまく。これは花の香りのつもりだという。

神殿内では次々とナッカドーの踊りがあるが、それぞれに意味があり、演目と概要は田村古巳の報告によると次の通りである。舞踏は17番あり、第1番は37ナッの筆頭であるダジャーミン（帝釈天）の踊り、ついで2番から8番まではマハギリとその眷属の踊り。9番はマンダレー・ボードーというマンダレーの保護者で兄弟と一緒に殺されたというナッの踊り。10番はミンビューシンといい、いつもは馬上姿で国内で広く祀られている。11番と12番は兎に関わる故事を示しており、兎をとらえて殺し兎に見立てたバナナに剣を突き立てて神像にかざす。13番、14番はアノーラター王の舟が兄弟の怨念で動かなくなったということに困むもので船を修繕して漕ぐことを表す。15、16番は兄弟の踊り、17番は兄弟を訪ねてきたパカンコジジョ（ウーミンチョー）の踊りである。

このあと、女性（妃）たちが踊り、つぎに男性が踊る。その後は神殿内ではあらかじめ希望していたナッカドーが割り振られた順番に従って激しく踊る。踊りの場は観客と鉄格子によって区分されており、ナッカドーに付いてきた信者だけがこの中に入ることができる。そしてすさまじい喧騒のなかで、信者たちはナッカドーのお碗にお金を入れたり空中に札をまく。出演順はきちんときまっていて番号札を付けたグループが順番を待っている。

### 祭りの場と祭りを支える人たち

ナッを祀る神殿を、ビルマ語ではナンナン（ナッの住む大きな建物＝神殿）といい、祠に類する小さなものはナッシンと呼ばれる。なお王宮はナントーといい普通の家には使わない。またナンナンを含む屋敷全体をナッコンといい、ナンナンを守る人をナンデイン

(nandain) といい、創始に関わった者の子孫であることが多く、父から男児へと継承される。

いっぽうナンナンに詰めていて参詣者の世話をしたりナッへの仲介をする女性があり、こちらはナッティン (nattein) と呼ばれる。その役割は母から娘へと継承され、娘がいなかった場合は一族や弟子から女性の後継者を選定する。この村にはナッティンは9人いるが、そのほかに、金箔を貼る係、蠟燭の係、冠の係、鉦を守る係などもある。

このようなナンナンの維持管理とは別に、先に見た大臣や王妃役をはじめ祭礼の時に特定の役割を果たす人々が祭りのときに集まってくる。かれら (男女) はいずれもナッカドーで、このナンナン専属ではないが、祭りに際しては毎年同じ役を務める。さきに見た大臣、王妃はもちろん、多くのナッカドーが儀式のときにそれぞれ決められた衣装をつけ道具を持って参加する。彼らは、ナンナンに通じる小路の中央の配水溝はさんで両側に並ぶ長屋にそれぞれの拠点を定め、自宅から運び込んだ各種の神像を安置し花と供え物を並べ担当する道具類を飾った前に終日詰めている。また、かねてから彼らを信奉している人々の祈願にも応じる。長屋の柱と柱の間を1コマとした場合、2003年の場合には神殿から見て右側の長屋に、持ち物で示すと、短刀役が2コマ、刀が2コマ、赤い帽子の兵士1コマ、槍と盾1コマ、銅鑼の係が3コマに陣取り、左側には、料理員1コマ、緑帽子のボーソン達と最年長者のグループで5コマ、他の大臣達が3コマ、王妃が1コマといった具合である。

このようなナッカドー達を全体として指揮し、束ねる役をナッオクといい、神事の際にもっとも重要な役割を果たす。タウンビョンの場合のナッオクは、マンダレー全体の指導者でもあるとされている。祭りのときの役割は、ミンドン王のときに決められたもので、それが今日まで継承されている。ただしコジジョの役は30年ほど前に話し合いで決めた。

先に紹介した大臣役の一人は、自分にその役が回ってきたのは、先生が亡くなったあと14人のナンディンが集まって決めたためだが、その時の基準はナッメイナカン (nat meit nar khan) であること、つまりナッの言うことが聞こえ、また聞いてもらえるという意味で、要するにナッに気に入ってもらえるということが資格になる。これはお祈りをしていくなかで、お告げのようなものを聞くことで決定される。

王妃役の一人、ドー・セイン・ハンさんは、普段はヤンゴンに住んでおり、自宅にはいろんな神像を飾りバナナやココナツを3セット供えて祀っているが占いなどはしない。雨安居の始めには自宅でナッポエをするが、ナッが自分に入ってきたと思えば占いをする



写真6 水浴のための行列が神殿を出る



写真7 水浴後、輿に載せた像が境内を練る

かもしれない。したがって自分ではナッカドーとは思っていないが知り合いからはナッカドーだといわれる。自分が先生につくようになったのは、音楽の調子を聞き分けることができからで、それから先生にいろいろ教えてもらい、さらにナッに関わることにお金をだしていたので仲間に入れてもらえた。先生の子供が一年間跡を継いだが、タウンビョンの人たちに、貴女がやりなさいと言われたので、先生とは血縁関係はない自分が継承し、すでに14年間この役をやっている。本来は親から子に継承されたのだが、今はそうではない。自分には37歳の娘がいて付き添いで見てはいるが継いでくれるかどうかはわからないので、この役はナッオクに預けるかもしれない。タウンビョンには昔は8つのナンナンがあったが、今では数えきれないほど増えている。信者が土地を買ってそこに建てるためである。

兄弟像の水浴の時にドラを叩く役のナッカドー（女性）によると、このドラが鳴らないと祭りが始まらないという。ここにいた一番の年長者は85歳になる女性ナッカドー。その娘もナッカドーで、このおばあさんの母はウーミンチョ（コジジョ）関係のナッカドーのなかで一番の地位を占めていたが、去年（2002年）109歳で亡くなった。その家族にはナッカドーはいなかったので、当時17、8歳だったこのおばあさんがナッカドになった。あとは娘が継ぎ、娘の跡は姪に譲る予定だという。

#### ワカウン月第11日、水浴の儀式

実質的な神事が行われるのは、ワカウン月第11日の兄弟水浴の儀式である。9時30分ころ神殿から銅鑼2台が出て神殿前で打ち鳴らす。すると水浴のための建物の周辺の人ごみが整理されて、やがて大臣たちが現れる。10時30分、神殿内に安置されている兄弟の像を輿に載せ、王妃・大臣・護衛らを取り囲んで神殿前の水浴場に運ぶ。像の冠などすべてとりはずし、格子模様のロンジーを着せる。次に井戸（実際は水道）から水をくみ白檀の粉を溶かし花を浮かべる。この水でもって像を洗うとき、その水に触れようと参拝者が押しあい、へし合いの大混雑となる。その中でスプレーで香水をふりかける人もいる。また水を持ち帰ると幸せになるというので水を欲しが人が多い。再び像に衣装を着けて輿に載せ、神殿脇の通路をびっしり埋めた人並みに揉まれながら進み、そのまま逆向きに戻ってきて神殿に入る。神殿内ではまたナッカドーたちの踊りが始まる。

水浴の場は本来は近くの川であり、そこに神輿で運んでいって船の上で行われていたが、近年になって先に述べた事情に加え見物人が死んだりして危険だということで神殿の内部で行われることになった。12日と13日には特段の行事はないが、神殿内ではナッカドーの踊りがあり、周辺は参拝者で賑わう。

#### ワカウン月第14日、兎肉の献上と伐木の1回目

タウンビョンの兄弟が旅をしている途中、アマラプラのあたりで兎の肉を献上されて元気を回復したという故事にならい、その時に兎を献上した人の直接の血縁者であるという人が毎年兎肉を供えにやってくる。祭りに際しては鮮やかなピンクの衣装に同色の鉢巻をし、まわりを多くの人に囲まれて登場する。この人はヨントセ（ヨンは兎、トセは集める）の人と呼ばれるが、本名はキンマウンエー（Khin Maung Aye）といい調査時点で38歳、普段はマングレーでバイクの洗浄を商売にしているが、元来はヤタナグの住民であり、後述するヤタナグの祭りに際しても重要な役割をもっている。ナッカドーではないから占い



はやらないが、一般人がナツに伝えてほしいという願い事は取り次ぐ。この時対象となるナツはタウンビョンの兄弟ナツである。

兎は以前はアマラプラの草地で捕獲したが、今は草地もなくなり兎もいなくなったのでメイショウ（ピンウールイン）の手前の山中で1つがいを捕獲してもらう。その謝礼は、以前は米2ピー（1ピーはミルク缶8個分）、食用油0.3ビスと200チャットだったが、今では米5ピー、油3ビス、それに3000Ksを払う（相場は、米1ピーが400～700Ks、ピーナツ油は1ビスで2500Ksくらい）。早く捕れた場合は期日まで飼っておく。調理するのは必ず5日前のワガウン月第10日で、イスラム僧に頼んで殺してもらってから、内蔵を取り出した肉を広げて自分で焼く。このときオスは性器をつけたままにする。これを逆U字形に曲げた竹の枠に、あたかも磔刑のように、前足を上部の横棒に、後足を下部の横棒に縛り付け、まわりをダビエの枝で飾り立てる。内蔵はそっくりつなごうまま少し煮て、それぞれ皿に盛り付ける（2皿＝兄弟分）。これをキンボーボーの前に持っていき、飲み水2杯、ろうそく2本とともに供えて見てもらうことになる。灯をともしたらろうそくが燃え尽きるまでその前にいて、消えたところで持ち帰る。この肉は誰が食べてもよい。なお兎はミャンマー人は普段食べることはない。月の中に兎と米を搗いているお爺さんが一緒にいるといわれている。

キンボーボーは、兄弟に従っていた人といわれている。ボーボーとは地霊ともいうべきナツで、国内の有名な寺院にはその寺院名を冠したボーボーが祀られている。たとえば、シュエダゴンボーボーという具合である。キンとは護衛ともいうべき人で、行列の先頭にあって隊伍を整えて差配する役をいう。この祠はマンダレー王宮の北西の方向角にあって、アマラプラからタウンビョンに行く途中にあたる。

ワカウン第13日に兎をタウンビョンに持っていき、途中でキンボーボーの所に寄ってその肉とヤシ酒を見せて「これから兄弟の所に持っていきます」と口に出して言う（ただし、現在ではここまで行かないで自宅でこの儀礼をやってしまうという）。それから牛の曳く幌つきの車に飾ってタウンビョンに行き神殿から100mほど離れた所に設けられた専用の控所に入る。そのとき、兄弟像の前に行き、戸を閉めて兄弟に「私の仕事できました」と言って、その前に置いてある水を飲む。そのあとで、ココナツにピンクの布を鉢巻のように巻いたところに100チャット紙幣をはさんだものを2セットもらう。これはナツからの肉のお礼ということになる。兎肉を正式に献上するのは翌14日の午後になる。

ワカウン月第14日の午前8時頃、アマラプラの女性たちが兄弟の神殿にバナナとココナツを供えに来る。その時の盛り方は、普通は3房のバナナのところを4房、その中央にモチゴメ・赤い菓子・焼き魚を置き、上に金と銀の小さな傘をさしたもの。これを200個ほど神前に運び、兄弟に見てもらう。表側にこれらを並び終えると裏の方から「バナナは何房か」と尋ねられるので、「こっちはバナナ4房」と答えるという問答がある。するとこのお返しとして持ってきたのと同量のバナナ



写真8 兎の供え物

が与えられる。これはお供えとして奉納されたものであり、それらをナンデインが取り揃えて渡すということになる。女性たちはこれを持ち帰って皆で食べることになっている。控所ではピンクの布で覆って花輪をかけてあった兎肉に、あらためて黄色の布をかける。キンマンエーはこれを両手にさげ、兎肉献上グループであることを示すワッペンを着けた人々に支えられるように神殿に向かう。彼自身も白服にピンクの鉢巻をし、ピンクの布を胴に巻く。同じような服装の女性が両側について介添えをする。兎を縛り付けた竹の杵を振りながら行進するのは、参拝者に霊力をわけ与えることを意味するのであろう。途中で紙幣をつけられたり酒やジュースを飲まされたりする。この日は暑さのためか行進中に貧血を起こしていた。ナンオクから顔に水を振りかけられたりしながら神殿に近づき、ナッカドーたちが滞在している小路を往復してから神殿前に着くと妃と大臣たちが手に手にダビエの枝を持って出迎えに出てはまた戻ることを3回繰り返す。兎は神殿の入り口で入るのをためらい7回目に中に入る。そのあと大臣たちは神殿への出入りを7回繰り返す。先頭に立つキンマンエーの気分で2、3回まわるだけで終わってしまうこともあるという。大変な喧騒のなかでウサギ肉献上の儀礼が終わるとこの兎肉は持ち帰る。なおあらかじめ別に調理しておいた兎肉は小さく刻み、野菜と混ぜて大臣や王妃に食べさせる。キンマウンエーは、午後4時頃まで滞在し、すべて畳んで帰宅する。

神殿には花と供物を持った参拝者が訪れ、神像の傍らにいる人に託していったん供えてもらってから持ち帰る。また神殿入口に安置されている虎の胴体を花束や札でなで、虎の口にバナナをくわえさせたり、札でこすったりする。虎は兄弟に従う神獣である。神殿内では音楽が奏されており、たまたま一人の若い女性がダビエの束を持って恍惚の表情で踊っていた。ヤンゴンからきたという28歳のこの女性は、この場で音楽を聴くと、うれしい気持ちがあふれてきて我慢できなくなり、タウンビョン兄弟と心が通じあうような気がする」と語っていた。

この日、木を伐る儀式があるが、内容としては翌日に行われる儀式と同じである。これについては、田村が1915年のブラウンの報告



写真9 兎を献上するヨントセの人



写真10 兎肉を食べる



写真11 神殿前の虎の像にバナナを供える（ヤタナグ）

を引いて、最終日に行われる木を伐る儀式は「一つは社の正面、西側に、兄を表して植えられ、他は北側に弟を表して置かれる。北側の木は最初に弟の守護者によって切られ、それから西側の木が、ビルマ王の下で着られた軍司令官の制服を着たnat-ok自身によって切られる」と記述している。したがって現在は前日に行われる第一回目の伐木儀礼は、100年ほど前には同日に兄弟別々に行われていた2回の儀礼を二日に分けたものと考えられる。

### ワカウン月満月、伐木儀礼

もっとも賑わう最終日の伐木の儀礼がおこなわれる。場所は神殿前の空き地で、一辺2mくらいの地面の四隅には、バナナの葉の上にご飯、もち米の菓子、焼き魚、青いバナナを載せてある。中央には煉瓦を埋め込んであり、そこにティンピンをさして立つようにしてある。この周囲を赤い制服を着た軍人3人を先頭に小型の銅鑼を打つもの5人、大臣、王妃などが左回りに5回まわり、そのあとで真っ白なビルマ服を着たナッオクが一気に木を伐る。それを待ち構えていた観衆が駆け寄り猛烈な争奪戦が始まる。立ち会っていた警官が激しく争う男たちの中に割って入り警棒で容赦なく打ち据える場面もあった。ナッカドーたちは切った木から枝を折りとり神殿内の兄弟像の前に捧げる。このあと神殿内で大臣たちの踊り、ついでナッカドーたちが一人15分単位くらいで次々と踊る。大騒動を最後に祭りは終わる。



写真12 伐木の時の神饌



写真13 ティンピンのまわりをナッカドー達がまわる

### 祭りのあと

大臣であることを示す緑色の帽子をかぶるボンソン役のソーモーナインさん（61歳）によると、満月の日に木を伐って祭りは終わるが、その翌日には兄弟の像をカーテンで囲った中で金箔を貼りなおす。囲うのは風で金箔が飛ばないようにするためである。新しい金箔はマンダレーの有名なマハムニ仏に金箔を貼っている人の中から上手な人4、5人来てもらって貼るが、代々同じ人である。金箔を貼り終えてから兄弟像を元の位置に戻し、



写真14 木を伐った瞬間

次に兄弟が持っている刀を砥石で研ぐ。これはソーさんの役目だが、今は形だけで踊りを



踊ることによってそれにかえる。踊りは3時間かかる長いもので、最初は兄、次いで弟、そしてコーミッションに捧げる踊りだとされる。その間、兄弟像に関係者がお札を飾りつける。そして別なナッカドーが虎の衣装をつけて神前で踊り、これで祭りはすべて終了する。

### 祭りへの参加を拒否されてきた村

タウンビョンの祭りに参加してはならないと言われてきた村が、タウンビョンの北に二つある。王の怒りにふれたタウンビョンの兄弟が捕えられたとき、兄弟を縛るための綱を出せと言われたルンダウン（Lunt Daung）村では、綱がなかったので、牛の鼻につける紐を提供した。ウインドウ村は籐で作った笥を出せと言われたが、なかったので竹の笥をだした。それによって兄弟は縛られ笥で打ち殺された。そのため兄弟のナッグが怒っているため両村は祭りにはいかない方がよいということである。

ルンダウン村は、水田に囲まれたのどかな農村で、水路には竹を編んで作った小型の笥が仕掛けてあった。村の守り神として民家の庭に馬上の武人姿のヤザンネ・ボーボーギーが祀られていた。20年くらい前までは、ここに奉納してある馬の人形は2頭しかなかったが、村の人が騎馬像を寄進した。吊るしてある馬はボーボーギーが村を見回す時に乗るものだという。村の戸数はおおよそ800という。祭り参加は最近まで村の禁忌として伝承され、かつ実行されていた。住民のドウ・グイ・ミヤン（75歳）さんの話である。



写真15 ルンダウン村の守り神

村の入り口にかかる橋からタウンビョンの方を見てもいけない、普段でも頭にタオルを巻いたままタウンビョンの方に行ってもいけない、靴をはいたままタウンビョンの方を向いてもいけない、など厳しい禁忌が伝えられていた。しかし、今ではあまり気にしなくなってお祭りにでかけることもあるといい、住んでいる人の半分くらいが次のような儀礼をしているという。すなわち、ワガウン月の11日（水浴の日）に1回だけタウンビョンに行く。そのとき、バナナ2房、ラペソー2箱、キンマ2つ（茹蟬の葉でつつんだ塊）を器に盛りその上に小さな傘を2本たてたものを持参する。祭り最終日となる満月には、米を砕いて水で溶き黒砂糖を入れて油であげたものと、ごはん4盛、鱗のある魚4匹を油であげたものを供えに行く。タウンビョンのナンナンには入り口がいくつかあるが、入ったときの入り口から出なくてはならない。これは昔からのやり方だが、今の人の中には供え物の半分を持ち帰る人もいる。話者の祖父母の時代には上のような供え物を持っていくのについて行った記憶があるから、タウンビョンに行ってもいけないというのは、もっと昔のことらしい。また話者の姉は、11日と満月の日にタウンビョンに行くが、タウンビョンの領域に入ったら履物を脱ぎ、暑くても傘は使わないと聞いていたそうだが、今ではこのようなことはない。ウインドウ村にも同じような習慣があると聞いているという。

このルンダウン村から上流4、5マイル離れた所にウインドウ村がある。そこまで途中には4つの村があるが、車は通れないので舟で通行する。同村の戸数は150くらいだが、



隣接して800戸弱の村がある。このウインドウ村でも同じようにしているらしい。その村はマンダレーの北、20kmほどにあるマタヤー（Matayar）タウンシップに属している。マンダレーからマタヤータウンシップには一日に3往復の列車がある。

シュエターチョオ（Shweta Choke）という川がエヤーワディー川の東側を流れており、マンダレーの南でエヤーワディー河に合流する。このシュエターチョオ川の水が周辺の水田を潤している。シュエターチョオ川とエヤーワディー河の間に池があり、その名をチーイン（Kyi In）という。チーは大きい、インは池の意味（現在ではインは養殖に使う池をさす）。チーインの周辺は雨季には水が溜まるので、タウンビョン兄弟の水浴は、以前は像を筏に乗せてこの水面で行っていたが、本来はチーインの中で行うものであったという。話者の祖母は15、6歳の頃に、この池での水浴を見たことがあると言っていた。今のよう形になったのは2003年からみて15、6年前からである。昔は水浴の日になるといつでも池の水位が上がっていたものである。ルンダウン村は、大水の時でも水没することがなく、川の近くで水が来ても1フィートくらいである。川の西側は大水のときは水につかる。上流にはミンドン王のときに造られたダムがあったが、小さかったのでネウイン時代にそこより少し上流にダムを造ったが古いダム跡も残っている。家の前の川は大雨の時にはエヤーワディー河から逆流してくることもある。

ウインドウ村よりも上流にカンペという村がある。それは兄弟を護送するための一行に関係した人数が多すぎて川の縁から落ちてしまったが、そのことをカンというので村の名の起こりになった。そして兄弟をさらに北の方まで連れて行ってマダヤのあたりで殺した。このようにタウンビョンよりも北に位置する村は兄弟殺害をいろいろ手伝ったので、北側の村々はすべて祭りにきてはいけないといわれていたという話もある。

### 船で参拝に来る村人

タウンビョンの西側の水路に船溜まりがあり、たくさんの船がとまっている。かつて像の水浴の場であったチーイン（大池）はこの水路のエヤーワディー河寄りにある。ここに停泊していたのは、水路を使って参詣に来た人々である。エヤーワディー河の上流のイエザジヨ（Yezagye）という所にコジジヨのナンナンがあるが、その村からやってきたという。このコジジヨは、いわゆるパカンコジジヨのことであり、コジジヨ自身がパカンからタウンビョンの祭りにやってくると言われてい



写真16 船で参拝にやってきた人々

る。パカンコジジヨの祭りは、3月中旬に行われる。船の人たちは、昨日出発し途中で一泊、今朝（8月9日）の10時ころに一艘がここに着き、もう一艘は昼ごろ着いた。2艘全員で150人くらいである。15年くらい前から毎年来ている。持ち主が誘いをかけて人を集める。料金は一人1000Ks、食事は自分持ちで夜は船内に寝る。明日は朝の7時ころに出て、途中でマンダレーに寄ってパゴダに参拝していく。帰村は午後7時ころになるという。他にも何艘も船がある。皆この人たちの近くの村の人だという。

### 王朝と神殿創設に関わる伝承

ボンソンの一人、ソーモエナインさんによると、現在の立派な神殿の由来は次のように伝えられている。すなわち、ミンドン王（コンバウン朝第10代、1853—78）の時代、ここには小さな祠があるだけだった。ミンドン王が、昔のアノーラタ王とタウンビョン兄弟の話を聞き、ここにお祈りすればバガンを征服することができると思って祈願をした。そしてバガンに攻め込んだとき、王の率いる軍勢がかりに1万であってもバガンの人には2万にも3万にも見えたので戦さに勝利することができた。しかしナッシンにお礼の祈りをすることを忘れたためミンドン王の陰茎がかゆくなり王妃も腹に水がたまる病気になった。そこでマンガレー近くに住むナンデインやナッカドーに聞いてみた。そのなかに大変な年寄りが出て、私は頼まれても王宮には行かないが、かわりに占いのできる孫がいるという。そこで孫が王宮に呼ばれたがこの子が本当に占いができるかどうか試してみたくなり、ネズミに箱をかぶせて中身を尋ねてみた。するとその子は「四足の動物がたくさんいる」と答えた。中身は一匹の筈だと開けてみたら、ちょうど孕んでいた鼠が子を産んだばかりだった。そこで王はこの子と面会したところ、王様の病気は遠征の前に約束したことを守らないからであり、きちんと祀れば病気は治ると答えた。そこで王はこの子を王宮に住まわせ、妃や大臣たちも占いを頼むようになった。ところが王宮内は女性が多い所なので、この子はあらぬ噂をたてられ宮刑に処せられてしまった。そこでこの神殿に来てナンティンになり、ナッカドーもこの時から始まったといわれる。この話はミンドン王の時代には合いそうにない。王名の記憶違いか、話そのものがミンドン王時代に造られものか、検討すべきだろう。

別伝では、アノーラタ王が中国に兄弟を連れて遠征したとき、兄弟の強さを認めた中国王は二人のために一組の夫婦をつけてよこした。兄弟が殺されたあと、夫婦だけがここに残り、それがこの神殿の始まりとなったという。兄弟ナッには領地が与えられ、ミンドン王の時代までは、そこからの税収はナンナンの収入となったと伝える。

この兄弟ナッの霊威については最近の国家行事に際して次のような話が伝えられている。ヤンゴン郊外に一つの大理石から刻みだされた巨大な仏像を安置した寺院が軍事政権のタンシュエ氏時代に造営され、大きな寺院として参拝者を集めている。この仏像の元になった巨石はマンガレー郊外で発見されたもので、現地で粗削りされた巨石を船でエヤーワディ河を下って運ぶことになった。ところが石を載せた船が全く動かず、牽引のためのチェーンやワイヤーも切れてしまった。そこでナッを信じている人が、ここはタウンビョンに関係ある場所だからと、兄弟ナッの力を借りることを提言し、祭りのときに大臣役を務める人のうち3人がタウンビョンに来て、ココナツとバナナを3組供えて祈ってから、お供えのうち2組と兄の像からピンクと黄色の布をもらってきて布を船のマストにつけたら船が動き出したという。この話は兄弟の霊がアノーラター王の船の動きを止めてしまったという伝説の再生といえよう。なお兄弟のうち兄は優しく、弟は怒りっぽい友人は多いと言われている。

### 3 ヤタナグの祭り

#### ヤタナグの位置

タウンビョンの祭りに引き続いて盛大な祭りが行われるヤタナグは、古都アマラプラ市街地の南に位置し、マンダレーからは約11kmの距離にある。アマラプラはエヤーワディー河の東にあるタウンタマン湖に接しているが、湖中に突き出した岬とマンダレー側とを結ぶウッペンブリッジ (U Pain Bridge) は有名な観光地となっている。ヤタナグは、このタウンタマン湖とエヤーワディー河とを結ぶ水路に近く、湖水及び湿地との間に位置している。エヤーワディー河はいうまでもなくバガン朝の中心地につながっている。その意味では、マンダレーの北に位置するタウンビョンとも似た地形ともいえる。両地ともそれぞれ細い水路でエヤーワディー河と結ばれており、大都市マンダレーの南北に対照的な位置関係にあることになる。

ヤタナグの祭りの中心となるヤタナグ・パゴダの周辺がこの祭りの舞台となる聖域である。ヤタナグパゴダを挟むように数多くのパゴダやナンナン（神殿）が建立され、期間中にはそれぞれの場所で互によく似た神事が挙行される。ヤタナグパゴダの広場（境内）の長屋に周辺から集まったナッカドー達が寝泊まりをする様子はタウンビョンと同じである。ヤタナグという地名の起こりは、インワ時代の王が、湖水の入り口近くにパゴダを建てよというお告げを受けて自分の持っていた宝石を寄進してパゴダを建立したことによる。ヤタナーというのは宝石、グーとは洞窟の意味で修行の場を意味する。川に沿った土手のような場所のことをコンボウといい、その内側のことをアトゥインという。祭りの対象であるポッパメイドーは、コンボウで亡くなりアトゥインで火葬に付されたという説もあるという。ポッパメイドーの名はメーワナという。メーは女、ワナは美人というパーリ語である。

ヤタナグが聖地とされるのは、タウンビョン兄弟の母であるポッパメイドーがここで亡くなったとされるからである。伝説では、兄弟の中国遠征に際し、ポッパメイドーはタウンビョンまで兄弟に会いに行った。そしてポッパ山に戻る途中、このヤタナグで兄弟の死を知って悲しみのあまりに亡くなったといわれている。現在、ヤタナグで最も古いとされる煉瓦作りのパゴダが、その墓であるとされる。崩れかかった個所がセメントで補強されており、かつては正面にセメントの鬼の顔がつけてあった。ポッパメイドーはポッパ山で花を食べる鬼女であるとされているからで、一般に見られる神像も女性の頭上に鬼の顔をつけてあるのですぐにそれとわかる。現在はこのパゴダを拝む人はほとんどいない。

この古いパゴダ周辺がヤタナグの祭りにおいては最も重要



写真17 ポッパメイドーのパゴダ跡



写真18 ポッパメイドーを迎え、送る場となる巨樹

な場所である。パゴダの正面から東側の川べりまで短い参道があって、川からの上陸地点に巨大な菩提樹が立っている。ポッパメイドーを迎え、そして送る行事はこの菩提樹の根元で行われる。迎えの儀式は、母がタウンビョンに行くナヨン月（ほぼ6月）の14日に行われ、トーソン（王妃役の女性ナッカドー）の中で最も経験のある人がポッパメイドーの恰好をして菩提樹の元まで迎えに行く。この日以降、ポッパメイドーはタウンビョンにとどまっているとされ、タウンビョンから戻る途中で亡くなったワカウン月の新月に母をポッパ山に送り帰す儀式が、やはりここで行われる。墓とされる場所にはポッパメイドーのナンナンもあったが、川の水位があがってきたので、祀られていた神像をヤタナグのいちばん北の位置にあるナンナンに移した。これが現在のアポナンナンで、アポというのは少し高い所、という意味である。

ヤタナグには、このアポナンナンを含んで大きなナンナンが5つある。北からアポナンナン、コーミョーシンのナンナン、そこから細長い参道を通るか、サンパンに乗って水上からも行くことのできる、ヤタナグでもっとも古いパゴダ（古いという意味のアレーがつく。さきのアポと対比される）に付随するポッパメイドーのナンナン、その近くにあるパカンウーミンチョウ（コジジョ）のナンナン、そして比較的新しいポッパメイドーやブーミング（イギリス時代の修行者で国内を行脚して多くの人々の信仰を集め、その像は国内いたるところの寺院や神殿に祀られている）を祀るナンナンである。これらのうちもっとも南に位置するナンナンを建立（修復）したとされ、現在も常時そこに詰めているのがブドチュウという名の人物であるが、彼については興味深い履歴と現代的な伝承があるので、のちにあらためて紹介することにする。

これらの中で中心となっているアレーパゴダの管理をしているのは、レウエイミンタ村（左手の馬飼村）で、昔ここではよい馬をだしていたというのが村名の起源である。パゴダを守る人は15人おり、ウーミンチョウのナンナンもあわせて管理している。また、このパゴダに通じる陸上の参拝路は、両側に数多くの店が並び、途中には小規模なナンナンが点在する。また境内には祭りに際してナッカドーが寝泊まりするための長屋があり、広場には臨時の遊園地が設定されて観覧車や演劇小屋が開かれている。参拝路はマンガレーに通じる大通りに合流する。この、いわゆるヤタナグパゴダ通りを歩くことなく、コーミョーシンのナンナンあたりから船で水路を下って行くこともできる。このコースは観光を兼ねた参拝者に人気があり、外国人向けのガイドブックにも舟で行くことが楽しいと紹介されている。これに使うサンパン（長さ5m、幅は1.5mほど）は祭り前に湖水の方から運び込んで準備するという。水上からヤタナグ・パゴダに近づくと、子どもたちがペットボトルを浮きにを使って泳いで船に近づいてきてお金をねだる。



写真19 小舟に乗って参拝する人々

## ワカウン月満月後第9日

筆者はワカウン月第9日（2012年9月9日）にヤタナグに入り、まずもっとも北に位置



するアポ・ナンナンに行った。ナンナンが附属しているパゴダはインワ時代に建立されたものである。パゴダに接している二つのナンナン（神殿）のうち、向かって左の小さい方がポッパメイドー達が住んでいる所で、中央にポッパメイドー、その左側にアメイエイエ（アノーラタ王の妻の兄弟の一番下で黒衣）、右手には秘書、マハギリの妻が並べられている。この祠に隣接する堂はより大きく、タウンビョン兄弟を中心にたくさんの像が祀っている。ポッパメイドーの祠では、像の脇にここのナンティン（女性）が控え、像の前には男性のナッカドーが座っていた。ここでも新月にはタウンビョンと同じような木を伐る儀式があるという。このナンナンを守っている女性、ドーエーエーテン（75歳）さんの家は、この役をミンドン王の時代から継承している。住まいはマンダレーにあるので、ここには朝来て夜帰ることになるが、日中は常時詰めている。男性のナッカドーは親戚で、願い事をナッにつき継いでお供えをあげる役で、誰かが頼むと「この人が供え物をします。ココナッツをあげますから商売繁盛させてください。これからも元気でやるように」などと願ってやる。次々とやってくる参拝者の捧げ物は、ココナッツの上半分を切って真っ赤なバラとダビエの枝をさしジャスミンの花輪を掛けたもので、参拝者はこれを額の前に捧げて神像に差し出す。また花束を奉納する人も多い。神像前の女性がこれを受け取り、神像に捧げる形をとって再び本人に戻してやる。おびたしい女性が次々とこれを持参するので、狭い神殿内は喧騒をきわめる。外にはこの捧げ物を売る売店が並んでいる。



写真20 ポッパメイドーに捧げるココナッツと赤い花

供え物を受け取る役の女性はこのナッティンの長女で、黒服を着て祭壇に花を供える役は孫だという。長女は次のナッティンになる予定で、そのあとは長女の弟の嫁がやることになっているという。

隣接する建物はこれよりかなり広い。参拝者が詰めかけてごったがえす場所に、神像を載せて水浴させるための輿が置かれている。輿は、中央部の台が長さ2m、幅95cm、両側に取手がついていてその長さは120cm、幅は150cm。全長は4.5mである。13時に水浴ということであったが、実際は11時頃に始まった。まずポッパメイドーの着物を脱がして輿に載せ、さらに兄弟とコーミョーシンの像を載せる。座布団のようなもので固定してゴムひもで締める。まわりにはタウンビョンと同じ服装の王妃（トーソン）と家臣（ボンソン）が付き添い、護衛隊も従う。そしてナンナンの前で輿の上の諸像にナンティンが水をかけ、石鹸で洗い香水を振ってから改めて着物を着せる。そして供え物を眼前にもっていき食べてもらう所作をする。それから若者が輿をかつぎパゴダの東側入口から入ろうとしては戻るという所作を数回繰り返す。その間、参拝者が紙幣をまくので揉み合いになる。そして元の道に戻ってナンナンに入り神像を下す。輿はただちに天井の梁に括り付けてしまうのでその下に空間ができると、若者たちがひとしきり騒いでからナッカドーが踊るナッポエになり、踊りのなかで、金色の器にお札を詰め込みその上に米を入れる。ナッポエというのはナッ祈願をした人がその成功を感謝して行うもので、成功とはいえないが約束だから奉納するというのはチョポエとという。ナッポエの踊りではナッカドーが鳥・お椀・酒

を持って踊るが、チョポエの時には何も持たずに踊るだけである。信奉者が大勢集まったナッカドーの踊りが盛り上がると、見るからにお金持ちらしい人がかねて用意の小額紙幣の分厚い束を盛大にばらまく。ナッカドーも衣装に紙幣を縫い付けてもらい、酒やタバコを口移しに信者に飲ませたりする。伝統楽器の音楽が場を盛り上げ、いっとき現実を忘れてしまうほどの狂乱ぶりが深夜まで続く。



写真21 信奉者とナッカドー

### ワカウン月満月後第10日

アポナンナンから徒歩で10分足らず、アレーナンナンに通じる水路に面してコーミョーシンのナンナンがある。コーミョーシンはとくにシャン族が信仰する神で、若い時から親がいないためにシャンのソーボア（土侯）により自分の子のように育てられた。シャン州からカチン州の山はほとんどコーミョーシンの領地だとされているので、宝石を掘りに行く人は、得た内のなにがしかを寄付すると約束し成功を祈願する。コーミョーシンの祭りで最も有名なのはマングレーの東にあるメイミョウ（現在はピンウールインという）のナンナンで、タウンビョンの祭りが終える満月の後の第3日に祭があり、やはり水浴の儀礼とナッカドー達によるナッポエがある。なおコーミョーシンのコーとはビルマ語の数字9の意味であるので、供え物はすべて9とする。例えば、バナナ9本、魚9匹、油0.9ビス、卵9個などである。ここのコーミョーシンの祭りを差配するのは、ナッカドーよりも一段上の地位にあるアウンサンウーという名のマングレーの人で、カナージーと呼ばれる。なお最近はナッカドーはオカマであるという、やや劣位のイメージが広がってしまったので、ナッカドー達の中には自らをカナージーと名乗る人がでてきたという。

この日は、コーミョーシンの水浴が行われた。以前は神殿近くの川に船を仕立て、川の中ほどで水浴させていたが、最近水位が低下し、さらに周辺が汚れたために岸辺でやるようになった。水浴のために御神体が神殿出る前には、タウンビョンと同じように、銅鑼、刀を持った護衛兵や女性ナッカドーとともに大臣、王妃が列をなして神殿前を数回廻る。神殿前の庭に台を設け、その上に衣装を脱がせたコーミョーシンとその妻の像を並べる。



写真22 コーミョーシンの水浴

水をかけるのは赤い布を頭に巻き、黒い衣装のカナージーで、これはコーミョーシンが黒い像であることから、コーミョーシン自身に扮したものと思われる。傍らに水浴のために花びらを浮かべた水槽が用意され、この水を神像の頭から何回もかけ、ついで石鹸で洗い、丁寧に体をふく。この間、香水を盛んに振りかける。そして新しい衣装を着せて黄色とピンク色の布をかけ再び神殿に戻す。このあと、若者が二人で銅鑼を打ち鳴らしながらナッカドーの小屋や集まった人たちの間をまわって喜捨を求める。神殿内では、まず先ほど水

浴の式をしたカナージーが剣を持って踊り、その後は延々とナッカドー達の踊りが繰り広げられる。

#### ワカウン月満月後第11日

この日はアレーナンナンでのポッパメイドーの水浴がある。神殿内での踊りのあと、神像を輿に載せて境内を練り歩き、神殿前に戻る。数年前まではここでも水上で水浴をさせていたが、現在はかつて船上に設けていた木製の仮殿を地上に組み立て、その中で行う。2003年にタウンビョンの祭りを見たときには、このヤタナグではまだ水上で行っていたのだが、帰国日が迫っていたため実際に見ることはできなかったことが惜しまれる。そのとき、ブドチュー氏（後述する宗教者）から聞いた様子は次のようである。

ヤタナグパゴダに付随するナンナンは4つの村で維持しており、ナッティンは各村から二人ずつで計8人が交代で務める。18歳くらいから上の女性で独身者が建前だが既婚者もいる。祭りのときは1村から4人出るが、普段は1人ずつ毎日交代で出ている。

水浴の儀式は船上で行う。サンパンを4艘横に並べたものを4組繋ぎ、その上に神殿を模した屋根をかけ、中にしつらえた台上に輿からおろした神像を並べる。前からコジジョ、兄弟、ポッパメイドーの順に載せ、ボンソン（大臣たち）、トーソン（妃たち）のほかにゴーパーカ（従者）が同乗する。この筏を2艘のサンパンで曳航して川に出す。4村のうち1村だけ1艘、他は2艘出して交代で曳航し、4パロ（1パロは1／4マイル）離れたところまで行き、そこで川の水を浴びせる。白檀を溶かした水もかける。戻ったら輿に戻し境内のパゴダを拝み、神殿内に戻って着替えをさせる。この船上での水浴は2010年頃までやっていたが、現在は水も汚くなったので船を出すことを中止し、船に載せていた神殿をナンナンの前に組み立ててそこで行うようにした。



写真23 かつての水上での水浴



写真24 ポッパメイドーの境内巡行（ヤタナグ）



写真25 ポッパメイドーに水をかける



写真26 水浴後の巡行



ヤタナグでは木を伐る儀礼はこのあとで行われるが、兎肉の献上はない。

2012年の水浴の様子は、基本的には先に見たアポナンナンでのものとほとんど同じであった。神像が神殿内に収まった後も、若者たちがダビエの枝を持って激しく踊り狂っていた。

#### ワカウン月満月後第12日、パンベ集落の水浴儀礼

この日は、ヤタナグパゴダでの目立った行事はない。ヤタナグの聖域の向かい側、川の対岸にあるパンベ（Pan Be）という集落でも同じ内容の祭りをを行っているが、そこはマハギリを祭神とするナンナンである。船着き場近くにはエイドゥインボーボー（マハギリ）のナンナンと記した看板がたてられている。脇に水面にせり出すように造られた高床の長屋があり、そこに10組足らずのナッカドー達が起居している。パンベ集落はヘンサーという大きな村を構成する5つの集落のうちのひとつで、戸数は100戸ほど、現在は織物業を主要な生業にしているが、昔のインワ王朝の時代はこの村の住民の多くは鍛冶屋だった。しかしタウンミョウがイギリス時代からシルクの山として有名になっていったので、この地域全体が織物業に切替えて発展した。パンベでも集落全体が鍛冶屋から織物業に転身した。

ナッカドー達の小屋の向かいにマハギリを祀るナンナンがあり、赤い冠をかぶったマハギリ像が真っ赤な布を背景に立っている。マハギリは37ナットのひとつだが、もとはマウンティンテルという名前の鍛冶屋（パペー）であった。かれは大力無双で知られたが、王の奸計によって焼き殺されてナットになった。つまりパンベ集落の鍛冶屋時代の職業神がマハギリなのである。また、マハギリは民家の神棚にココナツとともに祀られる家の守り神で、夜はその前を赤い布で覆う。これはマハギリが焼き殺されたという伝説にちなむものである。ここのナンナンのマハギリ像は吹き抜けの建物に安置され、この屋根の下でナッカドー達が踊り、また庭で水浴の儀式が行われる。この日は水浴を行う日である。まずマハギリ像を村の男たちが担ぎ出して建物



写真27 マハギリ像（パンベ集落の神殿内）

の前を練り歩き、台に据えて衣服を脱がせ、頭から水をかける。布で丁寧に拭ってから女たちが皿に盛ったラベソー（漬物茶）、焼き魚などを像の顔の前に捧げる。さらに脇に安置してある二体の女性像に対しても同様に行ない、再び若者たちが像を担いでナンナンの前を練り歩いてから堂内に納め、紙幣が舞う中で若者たちが躍る。そしてナッカドー達の踊りになる。

機織り業が中心となっているこの集落では、マハギリの一番下の妹を自分たちの職業神とし、マハギリと同じナンナンで祀っている。じつは彼女とタウンビョンの兄弟とは深い結びつきがあった。彼女にはクーインマウンという恋人がいたが、タウンビョンの兄弟のうちの一人が彼女を好きになってしまい、クーインマウンがエヤワーディー河で竹を川に流す仕事をしているとき、虎に命じて彼を噛み殺させてしまい、自分の妻にしてしまった。そこで彼女は大臣たちに申告して兄弟を罪に落とさせたという。彼女はかつて恋人が出かけるときにはその衣服を上手に作ることができたということから、マボンメイという機織



りの女神として信仰されるようになった。機織り業者は、ラペソーに胡麻をふりかけ、焼きニンニクを混ぜたものにジャスミンの花輪を添えて織機の上に供えるという。これは糸をセットするときや、作事中に糸が切れて困るといふときに行ふ。織り方は、昔から親の手伝いをしていて自然に覚えていく。女物のロンジーは1枚分が2ヤードで、1日1枚分だが、デザインがやさしければ、2枚分は織れる。デザインを考える人が村に2人ほどもいる。

#### ワガウン月満月後第14日、パンベ集落の伐木儀礼

ヤタナグパゴダの周辺では第13、14の両日には特段の儀礼は行われないうが、12日に水浴があつたパンベのナンナンでは、14日に伐木の儀礼がおこなわれる。ナンナンの前に太さ5cmほどのダビエの木を立て、ナッカドー達が周りを5回まわつてから木を伐る。このときは鋭利な刀を用い一回で伐らねばならない。皆が枝をとり集まるが村の人達だけなので争いにはならない。そのあとナッカドーが枝を伐つて堂内のマハギリ像の手に持たせるが、この葉を欲しがる人もいる。またナンナンの格子に枝を飾り付ける。そして堂内ではナッカドー2人が赤い布を拡げ、その上にバナナを供える。布の両側を2人で持ち、ハンモックの子供をあやすように揺する。これはマハギリの妹をあやすという意味になる。バナナを持ったナッカドーがそのまわりを踊る。そして鉢巻の前を紐状に結んで長く垂らし、後ろにジャスミンの花をさして象を模した女性が、四つん這いになつてナッカドーからコーラを飲まされ、やがてその姿勢のまま観客の前をめぐる。別なナッカドーが象を捕らえると、次に若いナッカドーが虎に扮してバナナを口にくわえて踊り、水を飲まされる。これはタウンビョンの兄弟が虎を使うという意味で、タウンビョン兄弟を祀るナンナンにはたいてい虎の像がおかれていて、参拝者が口にバナナをくわえさせている光景が見られる。つぎに猿が登場してバナナを欲しがるとして緑色の布をまとつたナッカドーが、踊りながら煙草を吸い酒を飲む。次の踊りはエイドゥインボーボー（マハギリ）が木に縛り付けられて焼き殺される場面を示す。妻がそれを見ながら倒れ込み、参拝者から受けたお金や花を供えた赤い布の上に枕を



写真28 パンベ集落での伐木儀礼



写真29 赤い布を揺りかごに見立てる



写真30 象の踊り



写真31 虎の踊り



写真32 夫の死を嘆く妻

置いた寝床に横になると、ナッカドーたちが布団蒸しにするような感じで布を巻きつける。このあと刀を持ったナッカドーの踊りがある。

このナンナンでは、水浴、伐木の儀礼はヤタナグと同じであるが、ナンナンの主神がマハグリであるために、彼の生涯の物語を踊るようになっていて、タウンビョンでの兄弟と王との争いという物語とは異なった構成になっている。

### ワカウ月新月、伐木と送りの儀礼

ヤタナグの祭りの最終日で、伐木の儀礼に引き続きポッパメイドーを送り帰す儀式が行われる。ヤタナグのアボナンナンから王宮風の衣装をまとったナッカドー達がヤタナグパゴダに向かう。現地ではタウンビョン兄弟のナンナンの前に木を立て、儀式中に観客が入り込まないように周囲に石灰で円を描く。そして銀盆にバナナの葉を敷き、その上にバナナと菓子を載せて中央に立ててある木の四方に置く。その周りを刀を捧げた赤い服の侍者を



写真33 ポッパメイドーを送り帰す

先頭にタウンビョンと同じくボンソン（大臣）、トーソン（王妃）、ポッパメイドーに捧げる真っ赤な花を持った人などが続き、歩きながらトーソンが刀で供え物を切る所作をする。やがてナッオクが刀で木を伐ると、観客が殺到して枝葉を奪い合う。この様子はタウンビョンと全く同じである。それからナッカドー達は一列になって川辺に行き、船着き場からサンパンに分乗してポッパメイドーを迎える場になっている菩提樹の前に漕ぎ寄せ、船上から祈りを捧げる。その後、どこかを目的地としているわけではなく、適当な時間水上にいて元に戻る。この間、船上では笛などを吹き鳴らす。多くの参拝者がサンパンに乗ってこの一部始終を見守っている。以上で、ヤタナグの祭りは終了する。

### ヤタナグに集う宗教者

ヤタナグパゴダの境内の長屋の6コマを使っているナッカドー（マンダレー在住、男性62歳）に話を聞いた。長屋の使用料は期間中で72000Ksという。ナッカドーになったきっかけは、祖母がシュエボでナッカドーをしていたが、母の代にマンダレーに移住して自分が跡を継いだ。いま子どもが4人（男3人、女1人）いて、孫もあるが、だれが継ぐかはまだ決めていない。跡継ぎはポッパメイドーが決めてくれるだろうという。なお、このナンナンに場を定めているのは、いちばん古い場所だからである。かつて北側のアボナンナンと争いになったことがあるが、その時、政府から北の方は神様の休憩所であると考え、両方で祀れということになったと聞いている。彼が一年間にわたってどのような祭礼に参加



写真34 長屋の一角で待機するナッカドー（ヤタナグ）

するのか、そのスケジュールは次のとおりである。

このナッカドーは、タウンビョンには祭りの最初から最後の満月までいた。そして引き続きこヤタナグに来て新月（最終日）の翌日までいる。次に、翌月のトーダリン月（ほぼ9月）7日から満月までの1週間くらいにわたる祭りがニンゲイという町にあるので、それに参加する。この祭りは、ニシェナビー（マハギリの妻）と龍が水を浴びるというも



写真35 突然のスコール

のである。またこれに引き続きトーダリン月満月の第2日にポッパ山でブーミンゴの祭りがあるので同第3日に行く。満月7日から9日まではウッペンブリッジのタウンタマン・ボーボーの水浴の祭りがある（タウンタマンは湖水の名）。この9日はボーボーが砂糖ヤシの木に登る日とされるので、この日だけは行く。10日はエンニンマハギリが戦争に出発する日という。ナド月（ほぼ12月）新月第11日は、タウンビョン兄弟が遠征から戻ってくる日なので日帰りでタウンビョンに行く。パコクのパカン・コジジョの祭りはタバウン月（ほぼ3月）の新月1日から満月まで行われる。ナヨン月（ほぼ6月）の満月10日から新月まではマンダレーのアメーションの祭り。同月の新月13日はヤタナグでポッパーメイダーを迎える祭りに行く。

ここに挙げた祭りの中で期間中ずっと詰めているのはタウンビョンとヤタナグだけである。本来の生業は、金採掘の道具や鉱石を砕くための機械の部品販売で、トラックバスも持っているので、小屋に飾る神像などはこの車で運んでくる。妻（56歳）もナッカドーで、この小屋にいる3人は妻の弟子たちである。忙しいときは知り合いを集めるのもっと増える。明日はナッポエがあるので10人以上が集まることになっている。妻のナッカドーに、何かを知りたいことを尋ねるときの料金を尋ねると、それは金額ではない、それぞれの気持ちであるということだった。この祭りが終わったらお寺に入って瞑想するつもりだという。踊りは他の人が踊るのを見ていて自然に覚えた。他のオカマがやるようなタイ舞踊の踊り方は知らない。自然に身体に霊が入ってきて意識しないで踊ってしまう。この状態のことを、ビルマ語でラメインカッ（lamainekat）という。

### 神殿復興と宗教者

ヤタナグのいちばん南にあるパゴダとナンナンは、現在はブドチュ（Budo Kyu）氏が管理しているが、昔からあったもので、ひどく荒れていた。長くミャンマーに住んでいたウヤマというインド人がポッパメイダーに対して、ここに住みたいので畑を寄付しますと祈願をし、法的にも国から認められた。ブドチュ氏は、このウヤマと知り合いだった。もとはシュエボの生まれでザガインに行き僧になったり還俗したりしていたが、ポッパメイダーを信仰しており、たまたま当地に住みなさいというお告げがあったので、ウヤマに話して住み着くことになったという。

本人に聞くと（2003年当時で70歳）、アマラプラのナンナンにはナンデインはいないので、自分が全部取り仕切っている。寄付してもらったお金はすべてパゴダの修理にあてて



いる。ここに来たのは1969年、シュエボ出身で、親はもとイスラム教徒だったが自分が生れる前に仏教徒に変わっていた。ただし、別な人の話では、1969年は、夜にポッパメイドーのパゴダの前を掘って何かを探した人たちがいたが、これに加わった人が全員精神に異常をきたしたという事件の起きた年だともいう。タウンビョンのやり方は派手すぎて自分には合わない。インドの歌などもやっているがよくないと思う。ヤタナグに集ってきていたナッカドー達はこうした厳しい指摘を拒んで帰ってしまう人が多くなった。ナッグが入って精神に異常をきたしたような人がいたら、ここに連れてきなさいと言っている。

ブドチュ氏は、ヤタナグパゴダの祭りのポッパメイドーの水浴の時には薄化粧をして全体を仕切っていたが、ナッカドーという立場ではなかった。彼の行動については、すでに伝説化された興味深い話が語られている。

マハギリを祀るパンベ集落では、ブドチュ氏の熱心な信奉者がいる。その言では、マハギリの神像はブドチュ氏が寄進してくれた。彼はナッオク（ナッカドーたちの取りまとめ役）ではないが、村の人々のために信仰上の指示をしてくれるし、自費でいろいろ寄付をしてくれるので皆から信頼されている。彼については次のような神秘的な話がある。

ある人が、ブドチュ氏からインワ（かつての王宮跡）に行こうと誘われたが、断ったところ突然川に突き落とされた。そしてちょっと目を閉じていなさいと言われ、気が付くといつのまにか昔の王宮の中にいた。ブドチュ氏が言うには、昔われわれ二人は王宮で働いていたことがあり、あなたはかくかくの仕事をし、私はお寺を造っていたのだという。びっくりして、帰りましょうと目を閉じていたら、元の場所にいた。すごい人だと感激し、二人でパゴダを造ったりナンナンを建てたりした。その後、この人が自分の村にパゴダを建てたいと思ってブドチュ氏に相談し、現在のパゴダとボーボージーを造った。やがて寄付のお金が入ってくるようになり、マンダレーの技術者（高収入者）が寄付をしてくれるようになった。この人は、ブドチュ氏がザガインに住んでいた頃、同じくザガインにいて家族が知り合いだった。海外出張でシンガポールに住むことになったので、その前にポッパ山にお参りして、成功したら信仰するナッグに対してナンナンを建てますと祈願した。そして3年後に帰国してお礼参りに行ったら、誰かがすでにナンナンを寄付していたので、ブドチュ氏に相談したところ、ここ（パンベ）にナンナン建立を計画しているところだから、寄付をしなさいということになり、合計で150万Ksをかけてナンナンが完成した。毎年、祭りには必ず参拝にやってくるという。

## 4 まとめに代えて

### 二つの祭礼の関連と成立の背景

ここに見てきたタウンビョンとヤタナグの祭礼は、バガン朝の王とその家臣とをめぐる物語を軸に構成されたもので、その主役はポッパメイドーと呼ばれる母親とその二人の息子たちである。前半のタウンビョンでは王によって殺された兄弟が、後半のヤタナグではその死によって悲嘆にくれる母が祀られる対象となる。舞台となる土地は異なっても、二つの祭りは密接に関連しており一連のものとみることができる。その理由は、日程的にも催される場も若干離れてはいるが、月齢をもとにすると、兄弟の祭りは満月、母の祭りは新月ということで、年に12ある朔望サイクルのひとつが、そのまま祭りの起承転結と重なっ



ているからである。

物語の発端をなしたバガン朝のアノーラター王は11世紀の人物であるが、非業の死を遂げた者の霊(ナッ)を鎮めるという儀礼が成立した時期は明確ではない。だが、タウンビョンの祭祀の始まりについては、ビルマ最後の王朝となったコンバウン朝のミンドン王との関連が伝承されていること、またヤタナグについては、ヤタナグという地名の起源が、時代的にはそれほど古くないインワ時代の王に関わるとされるなど、祭りの背景となるべき歴史は物語の主人公達の時代よりはるかに後世のものである。つまり、兄弟やその母についての物語をもとに、現在のような形態の祭りが成立したのは、必ずしも古くないということが推定できよう。

また物語風に構成されているナッカドー達の舞踊も、国内各地で日常的に行われる私的なナッポエと同じ内容であることからみても、祭りの形態が固まったのは、インワ時代よりは遡らないのではないと思われる。

ただし、全体を通じては日本の御霊信仰にも通じる鎮魂の儀礼が核となっており、そこに演劇的要素が加えられ、さらに降霊と送霊の儀礼としての伐木や、仏教における灌頂儀礼にも通じる水かけ、すなわち水浴の儀式などが取り込まれることで、数日間にわたる壮大な祭りのプログラムが出来上がった。

もちろん、この形式がタウンビョンで初めて成立したとは考えにくい。構成が類似した祭りは、上ビルマにおいてはかなり多くみられる。それはマンダレー居住のナッカドーが参集する一年間の祭り暦が物語るところである。この形式に基づく祭礼の内容は、むしろナッカドーたちによって固められた可能性が高いのではなかろうか。筆者が実見できたパンベ集落のマハギリの祭りも、民間宗教者が介在することであらたに定着したものであった。マンダレー周辺で実施されている数多くの祭りについての現地調査が進むことで、タウンビョンとヤタナグの祭りについても、より深い理解と分析が可能になるであろう。

なお本稿ではヤタナグの祭りの期間中に並行して行われるコーミョーシンとパンベ集落のマハギリの祭りについてもその内容を具体的に記述したが、タウンビョン兄弟とその母の祭りという本筋には直接関係ないものである。したがってコーミョーシンとマハギリについての記述を省いても本稿の論旨にはまったく支障がない。しかしその構成内容がほぼ同じであることは、上で推測したようにタウンビョンの祭りとして確立された一連の様式が、ナッカドーたちに祭りの定型として認識されていることを示している。祭祀対象としてのナッが異なる場合は、その物語にふさわしい演目に入れ替えて上演されることは、パンベ集落におけるマハギリの祭りがよく表れている。もう一点、ヤタナグにおけるポッパメイダーの祭りでは、アポナンナンとアレーナンナンという二か所で同じような儀礼がおこなわれていることも留意しておきたい。それはアレーナンナンからアポナンナンが分かれ出たという背景を考えれば、ある種の対抗関係から両者が同じことを行っているとみてよいが、ポッパメイダーを迎え、そして送り帰す儀礼はアレーナンナンに近い巨木の下で行われる。したがってヤタナグの祭りの本来の姿は、アレーナンナンを中心とする一連の儀礼の中にあると考えるべきである。

## ナッカドーと地元民の関係

祭りの場となる神殿を維持し、祭り全体の運営に関わるのは、古くから神殿の維持管理

を世襲的にやってきたナンデインという男性と、参拝者の世話をし祭神との仲立ちをするナッティンといわれる女性である。ナッティンは母から娘へと継承されることを原則とする。

地域の祭祀の場であるナンナンが血縁によって継承され、しかも男女それぞれの役割が異なっていることに注目すべきであろう。あえていえば、祭祀そのものは女性が行ない、その場は男性が確保していくという形式は、古代日本における祭政一致の場を連想させる。

しかし、専門的な技能を必要とする舞踏や音楽を担当するのは、その日に合わせて参集するナッカドー達である。踊りを含めた一連の信仰儀礼は、職業的な宗教者を招いて執行してもらうことになっている。ナッカドー達が最も多く集まるのはタウンビョンの祭りであるが、引き続いて行われるヤタナグの祭りにもタウンビョンに参集した多くのナッカドーがやってきて、ほぼ同じことが行われる。両地とも、パゴダやナンナンの維持管理は地元で行うが、神事に際しての重要な役割は同じナッカドーが担っている。

このような仕組みは、日本の中世における荘園の祭祀と芸能集団との関係に似ていないだろうか。現在、日本各地に中世から伝わる郷土芸能として伝承されている田楽・田遊びは、それを演じる芸能集団が村々を訪れて演じていたものが、やがて集落住民の間に定着して今日に至った例が少ないと考えられている。ナッカドーについての研究には、このような視点も必要ではなかろうか。



写真36 女装しているナッカドー（ヤタナグ）



写真37 神前で踊るナッカドー（ヤタナグ）

### 兎献上の意味

職業的なナッカドーや地付きの神殿の維持管理者とは別に、二つの祭りに直接かかわっている重要な人物がいる。それが代々兎を献上する家の当主で、ヨントセの人と呼ばれる。兎肉はタウンビョンの兄弟がアマブラを通過したときに捧げられたとされ、もともとヤタナグに居住していたのだが、現当主キンマウンエー氏の祖父の代にマンガレーに移っている。祭りの進行は、タウンビョンで始まり、ヤタナグで終わるが、彼はヤタナグの祭りの始まりに際して、ダビエとバラの花を束ね、これにザガワ（ポッパ山に咲いている黄色い花）を添えて村内にあるナンナン3か所に供える。アテナのナンナン（村の入口近く）、マレーナのナンナン（菩提樹の所）、アウンナンのナンナンである。これは、兄弟二人の父の代わりに供えるということで、平服のまま朝のうちに回ってしまうという。調査時にナンデインたちに確認したところ、毎年やっているが本年の場合、いつ来たのか知らないということで筆者自身はその場を見ていない。しかし、ヨントセの人が、マンガレーを間

において連続して執行される二つの祭りに関わっていることには大きな意味がある。つまり、二つの祭りの基礎的な祭祀の場面で両者に直接関わっているのは、まさにヨントセの人なのである。このことは、タウンビョン兄弟の悲劇と母の嘆きという物語が、マンダレーを挟む2つの地点で連続的に展開し、その中でヤタナグの住民が両者を結び付ける重要な役割を担っていることを示している。

兎肉の献上にも重要な意味があったのではないか。釈迦の前生譚（ジャータカ）には、兎が自らを火中に投じるという自己犠牲の物語があり、これが月の兎の起源になっている。ヨントセの人が兎を焼いて供えるということは、この物語に関わりがあるかもしれない。兄弟は、兎肉を献上され、それを食べることで、衰えた力を回復することができた。ビルマ人は一般に兎肉は食べないと言われているなかで、兎肉、それも焼き兎の献上には、隠された大きな意味があると考えられる。兎肉献上の儀礼は、タウンビョンとヤタナグとを結びつける鍵をにぎっているのではないか。

なおこれは突飛な想像かも知れないが、徳川家康の先祖が諸国流浪中、大晦日に知り合いのもとに立ち寄ったとき、その家では雪中で兎を仕留めて正月の馳走にしたといわれ、長く江戸幕府の正月行事として兎の肉の吸い物を食べることがあった。象徴的な意味を考えれば、衰えた力が兎肉を提供されることで回復したということになる。こうした類話との比較の必要性を感じる。

### 神像の水浴と伐木儀礼

タウンビョンの祭りの全体的な構造については、早くに田村克己が次のような分析を行っている。ひとつは、この伐木の儀礼が農耕儀礼としての性格を持つというもので、かつては木を伐ったナッオクが切り口を見てその年の豊凶を占ったとされ、また執行される時期も雨季の最中で、ちょうど上ビルマでは田植えが始まる時期にあたっていると指摘している。またナドゥ月（ほぼ12月に相当）に兄弟が中国遠征に出発する祭りがあるが、このときナッから参拝客にご飯が供えられることになっており、これは時期からみれば収穫祭にあたるかもしれないという。なお雨季の真最中に水浴の儀礼があることは若干奇異ではあるが、これは兄弟が中国から帰ってきたタブン月（3月相当）の祭りが、雨季前の水祭りとして行われていた可能性を示唆している、というのである。

この考えの大筋については筆者も同意する。ただし祭りの重要な要素である水浴は、ミャンマーにおいては普遍的な行事であり、タウンビョンだけのものではない。むしろ祭りを総合的に構成するなかで、重要な要素として組み入れたのではなかろうか。水上で実施していた点については、インレ湖のフェンドーウパゴダの仏像巡行の仕組みに類似している点も見られる。水上におけるさまざまな儀礼は、バガン王朝以下の諸王朝の権力がすべてエヤーワディー河の水運に関わっていたことに関わるものであろう。なお、小舟を並べて神体を載せ、水上を巡行するという形式については、日本における湖上渡御（たとえば津島祭り）にも類例があることを考慮すべきだろう。

つぎに伐木の儀式であるが、これを単純化してみれば、神霊を聖なる木に依りつかせる、一種の神おろしの儀礼であり、最後にその枝を伐るのは、神が天上に戻ることを示している。したがって、伐られた木はいつとき聖なる存在であったゆえに、人々が枝葉を奪い合うのはその神威を入手しようとするということになる。この枝葉を奪い合う形態も、じつは日本

各地の祭礼にみられるものである。

この祭礼を単純化すれば、ある地域の地霊（豊穡の神）を迎え、神をたたえるさまざまな踊りを奉納し、最後に依り代となっていた聖木を配分するということになる。

### ナッカドーとナッ信仰研究の意義

本稿では、二つの祭りに参加していたナッカドーから直接聞き取ることでできた内容を煩を厭わずに記載した。これは現代でもミャンマー人の間で広く受容されているナッ信仰の具体的な表れであると考えからである。彼らは、いかなる資質を有し、いかなる契機でナッカドーになるのかを自ら語ってもらった。また多くが先生と呼んでいる師匠から、ナッカドーとしての基本を学習し、先生の高齢化にともなって跡を継ぐという例が多いことがわかる。ただし、ナッカドーを生業として収入をすべて信奉者に依存するというよりも、多くのナッカドーは常には何らかの仕事に就いており、必要に応じてナッカドーとしての役割を果たす者が多いようにも見受けられた。

僧侶に対しては国家的な規制のもとに専門的教育機関があり、専門職として社会的に尊敬を受けている。それに対して、宗教者としてのナッカドーは社会的には、どちらかというところ普通の市民ではない特殊な存在である。オカマという男女どちらにも属さない、いわば境界の性は霊界・異界との交流にふさわしい存在だが、それゆえに敬して遠ざけられ社会的には特殊な存在だとみなされる。しかし、だからこそ、ナッと人間の媒介ができるのである。ナッポエにおける一連の儀礼や、踊りには定型のプログラムがある。ミャンマー国内において、ナッカドーについての研究はあまり行われていないようだが、ナッカドーに必須の祈祷の手順、舞踊は、ほとんど同じ様式で行われているのを見ると、そこには何らかの基準があるはずである。それがかつての王朝における重要な儀礼の反映であったとすれば、ナッカドーについての研究は、これまで蓄積されてきた仏教に関する研究とはべつに、かつてのビルマ王権の性格やビルマ人の思想研究に大きく貢献できるのではなからうか。同時に、ビルマの庶民信仰が、ここに挙げた例にとどまらず、日本の民間信仰に酷似している例を数多く見るにつけ、ナッ信仰の研究は、日本民俗学にとっても大きな意義を有するものであると考えられる。

### 註

- 1 田村克己ほか編『アジア読本 ビルマ』河出書房新社、1997年、206p。また37ナッについて個々の成立事情や像のかたちなどについては、Sir R. C. Temple, Bar., C. I. E “Thirty-seven Nats—A Phase of Sprit-Worship prevailing in Buram” London W. Grigs, Chromo-Lithographer to the King, 1906 に下記に詳しい。
- 2 田村克己「ビルマのNat信仰に関する諸問題」『鹿児島大学史学科報告』27号、1978年7月。田村克己「ビルマの精霊信仰と民間伝承」・「討論」君島久子編『日本民間伝承の源流』小学館、1989年。高谷紀夫『ビルマの民族表象—文化人類学の視座から』法蔵館、2008年
- 3 この話の筋はミャンマー人には広く知られているが、本稿に要点を整理するためマウン・ティン・アウン著、宮本神酒男訳「大いなる山の神」宮本HPを参照した。
- 4 高谷紀夫『ビルマの民族表象—文化人類学の視座から』法蔵館、2008年、33p